

最も古く 最も輝しい歴史を持つ日本

調和・平和・大和の心が世界を救う

宿谷直晃

敷島の 大和心を 人間はば

朝日に匂う 山桜花

本居宣長

大和魂とは調和の精神

親子一体、夫婦一体、君臣一体、国家と国民が一体、労使一体、この調和の精神こそ日本人本来の特性であり、大和の国とも称されてきた所以であります。

日本語は性格を穏やかにする

モントリオール大学日本語学科長として、20余年にわたりカナダ人学生に日本語を教えてきた金谷武洋氏には『日本語が世界を平和にするこれだけの理由』の著書が

あります。その中で目からウロコの話が書かれています。「過去200〜300人の教え子を日本に送り込み、日本語の学習をさせてきた。カナダに帰って来ると殆どの学生が優しくなっています。なんと日本語を話し日本

で生活すると本人が気づかないうちに性格が変わってしまふのです。話し方も変わります。声が変わります。静かな声で話しようになります。つまり攻撃的な性格が姿を消します…」と。カナダ人学生が日本語を使って生活するようになると、こぞって性格が変わって調和の心を持つようになる、というから驚きです。その原因は何処にあるのでしょうか？

和の心を醸し出す日本の言葉

金谷教授はその著書の中で「日本語は共感の言葉、英語は自己主張と対立の言葉」であることを詳述され、構文上人称名詞を必要としない日本語に反し、英語は必ず主語や目的語を明確に表現するので、自ずから対立関係が生まれるようになる。自己主張性の希薄な日本語を学習し使うようになると、学習者の世界観が競争から共同へ、直視から共視へ、抗争から共存へ変わると説かれています。

この母音中心の日本語のパワーが脈打っているのです。前掲のカナダ人日本語留學生の話はこのことを端的に裏付けていると言えます。

今、日本語は危機に瀕しています

古くから営々と日本人の心に引き継がれてきた精神的特長は「人と人が調和する」「人と自然が調和する」「人と神が調和する」ところにあり、ここに日本の「和の文化」を生み出してきた源泉があるようです。このことを裏付ける判りやすい事例として、日本には1000年、2000年、それ以上続く長寿企業が世界的に見ても圧倒的に多く、世界最古の企業ランキングの上位が皆日本企業であり、首位の寺社建設で有名な金剛組に至っては、なんと聖徳太子の時代から継承して今日に至っているとのことです。

このように営々と続く長寿企業が多いということは、そこに和の心が強く働いていることを裏付けています。その根本的原因が母音中心の和の波動を生み出す日本語

日本語という言葉そのものの中に自己主張にブレーキをかける仕組みが潜んでいると言つのです。「だから、日本語が世界を平和にする！」と結んでいます。

日本語が「平和をもたらす言語である」ことに関し光透波理論からアプローチすると、更にもっと根源的な理由が浮かび上がってきます。それは日本語は世界で唯一、母音中心の言語であるということです。英語を初めとする欧米の言語も、中国語や朝鮮語等のアジア諸国の言語も、その他の世界の各国・各民族で使われている言葉は総て子音中心の言語と言われています。この母音中心の言語であるところに調和の心を醸し出す原因があると推論されます。

母音中心の日本語は母の響き、和と包容力に富んだ波動を生み出す言葉ということです。そこに我が国独特の調和の心、和の文化が築かれた素地があったと考えられるのです。一方、子音中心の言語は一音一音の独立性が強く、自から利己性や競争性の波動が強くなるようです。日本人の穏やかで調和に富んだ民族性の奥には、

にあったと考えられるのです。ところが今日、悲しいことにこの素晴らしい日本語が大きく崩れ出しています。意味不明な外来語やカタカナ語が年を追うごとに増え氾濫しています。学校の授業や企業でも英語が重視されつつあります。さらに小学校低学年からの英語教育の義務化により、日本語をしっかりと習熟出来ないままに育つ言語的無国籍人化が加速度的に進行しつつあるようです。

このことは日本語を母語にする日本人本来の心が崩れることに繋がりますから、日本の国にとり日本民族にとり最大の危機が迫りつつあるとも言えるのです。

平和をもたらす母音中心の日本語が醸し出す日本の和の心こそ、世界を平和共存へと導く活路であることに気付く必要があるのです。

転覆闘争を繰り返す世界の国々

日本の国は、今日殆ど使用されていない皇紀によれば二千六百八十年間にわたり営々と続いてきた国柄です。

二百程ある世界の国家の中で最も古い歴史を有する国家です。その根底には大和の心が脈打っていたと思考できるのです。

エジプト・ギリシャ・チャイナ・インド、その他の国々も、皆、元の国を継承している国ではありません。メソポタミア・ローマ・ユダヤ王国・アンコールワット・マヤ・インカ等の文化的に繁栄を誇った国々も、皆、長い歴史の流れの中で消滅しています。

中国五千年の歴史と豪語していますが、易姓革命の国であり、民族も思想も歴史も全く異なる力の強い者が入れ替わり立ち代って強奪して、次々と支那中原の地を支配しているに過ぎません。そこには継続性や一貫性はないうのです。今日の共産中国に至っては僅か70年程の歴史しか有していません。

このような支那の例に限らず、日本以外の国々の歴史は殆ど弱肉強食、強い者が武力をもって支配する転覆闘争の歴史を繰り返しているのです。



京都御所

京都御所を見れば明らかのように、スメラミコトが住まいする御所は塀ひとつで区画されているに過ぎず、堀や城壁で堅固に守られているものではありません。天皇を襲撃しようとすれば盗賊・山賊の類でも可能であった筈です。この無防備に等しき御所にスメラミコトは世々住まわれていたのです。しかも三千年近くもの長い歳月を……、他国では考えられないことなのです。

皇統連綿と続く日本の国柄

ところが、日本の国は神武東征後の建国以来、天皇を中心とした国柄を継承し続けている国です。この度ご即位なられた令和天皇は126代目の天皇になるわけです。日本の国の天皇の地位は不動であり、武力でスメラミコトより勝った者が実権を握ったとしても安泰だったのです。ここに我が国の我が国たる所以があるのです。

遠くは権勢を恣（ほしいまま）にした藤原氏を初め、平清盛、源頼朝、北条時宗、足利尊氏、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉、徳川家康・等々の権力者たちは、皆、太政大臣・関白・征夷大將軍・執権などと天皇Ⅱスメラミコトの臣下として、この国の政治を代行し主導権を一時的に握っていたに過ぎないのです。これらの我が国の歴史上に輝く英傑たちの中には、武力的には天皇の地位を廃絶させる力を有していた者もいたのですが皆、己の分を弁え天皇の権威を畏敬し皇位を脅かすことはなかったのです。

日本人は等しくこの間、天子様と崇め誰一人として天皇の地位を脅かす者はいなかったのです。例外的に蘇我氏や弓削の道鏡などが天皇の地位を篡奪しようとした事例はありますが、彼らは渡来人であり、純然たる大和の民ではなかったのです。そして我が国が神国と称されてきた所以の一つは、天皇の地位を奪おうとする彼らの目論見は、ことごとく失敗していることです。ここに日本の国柄、日本の日本たる特長があるのです。そしてその奥には大和の心が脈打っていたとしか考えられないのです。

GHQの占領政策で本来の国柄・精神を喪失

ところが、この世界に比類ない素晴らしい日本の国柄は、先の大東亜戦争の敗戦によって進出してきた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の占領政策によって、根底から崩されてゆくことになったのです。その実行

者は日本の占領政策を実質的に牛耳っていたアメリカのニューディーラーというユダヤ系の共産思想のグループでした。

有名なウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムや東京軍事裁判、その他の日本の弱体化の政策により戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけ、日本人の精神・魂を崩壊させる宣伝工作が強烈に進められていったのです。

彼らは敗戦後のショックで精神的空白状態に陥った日本人を強烈にマインドコントロールし、階級闘争に執着する日本共産党や日教組などに代表される共産主義思想や、多数決原理と自由・平等を鼓吹する民主主義思想を植え込んでいったのです。その結果、日本は精神的分裂症、抜け殻状態になり、本来の輝かしい日本精神を失って今日の腑抜けた精神的混迷状態に陥ってしまっているのです。

かつての日本人の精神性の高さは、本稿末に紹介しているアインシュタインやリシャールの言葉のように、世

日の丸が象徴する言霊の国

古来、日本の国は日ノ本の国、日出ずる国、惟神（かんながら）の国、言霊の幸はう国、神国とも称されてきました。国号も日本と称し、霊的太陽を旗印にした日の丸を国旗としています。国歌の「君が代」の歌も古代から歌い継がれており、自然発生的に生まれているのです。そして天皇を中心に営々と三千年近い輝かしい歴史を有することが出来ていました。

敷島の日本の国は 言霊の幸はふ国ぞ 福くありとぞ

柿本人麻呂

「霊（ひ）ノ本ノ国」とは霊性＝精神性の豊かな本ノ国と解せます。もっと言えば「霊」（＝霊的エネルギー）が因（もと）にあつて、その反映として「体」（＝形・物質）が顕われてくるのが宇宙の仕組みでありますから、日本の国は世界の元の国の意味も秘められているのです。それ故に霊的太陽を象徴する「日の丸」を国旗にしており、昔から「霊ノ本ノ国」「神国」とか「惟神（かむながら）

界を卓見している外国人の識者の方が、明確に掴んでおりました。

その一人に、ユダヤ人の長老であるモルデカイ・モーゼという人物がおります。彼は同胞のユダヤ人たちが人類史の中で比類ない日本の精神性と国柄を崩壊させてしまった大きな誤りに気付कि、『あるユダヤ人の懺悔、日本人に謝りたい』の自著の中で「日本は万世一系の天皇をいただく君民共治の鑑であった。世界の歴史を通じてこのような国家は決して存在しなかったし、今後も他の民族は作りえないのではないだろうか……」と記し、深く懺悔しているのです。

そして、モルデカイ・モーゼは、（かつての日本のように）『和』の保たれた社会に自由・平等を持ち込むと、どういうことになるだろうか？ おそるべき分裂現象が起こるであろう。『和』はたちまちに破壊されるであろう。事実、戦後の日本は今日に見る如く、世界で最も『和』のない国になってしまった」と明言しているのである。

の国」とか「言霊の国」と称されてきたのです。

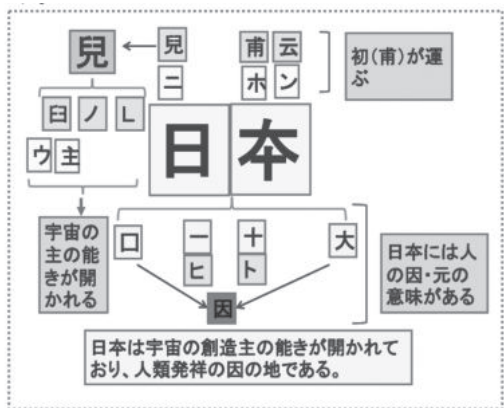
日本の国柄と本質を読み解く

では昔から言霊の幸はう国と言われてきた日本の国はどのような資質を有している国なのでしょうか？ 文字の言霊学・光透波理論の字割で読み解いてみましょう。初めて光透波の字割に接する方には難しいと思います。が字割理論で読み解くと、文字の奥に秘められた深意・真理が浮かび上がってくるのです。

既に本誌「サムライ・平和」の発行元・でくのぼう出版から一昨年10月に発行していただいた拙著『光の言葉で原点回帰』の中で詳述していますが、再度「日本」を読み解いた図解を下記のように紹介させていただきます。

※光透波とは昭和32年10月、小田野早秧女史によって拓かれた新時代の文字の言霊学。詳しくは、本誌発行の「でくのぼう出版」から発売されている『光の言葉で原点回帰 全ての人が救われる道 ミロクの時代を導く光透波理論』をご参照ください。

※天鏡図とは言霊50音の一言一音の真意を映し出した一覧表です。小田野早秧女史が、4年4か月にわたる断食すれすれの探究生活をして読み解かれたものです。この天鏡図をベースに光透波の字割は行われ、文字の奥に秘められた宇宙の真理を読み解くことが可能になっています。



【解説】
「日本」の読みは「ニホン」。

味を取りますと

- ② 「日本」の国とは秘められた答えの因(素)の国。
- ③ 「日本」の国は「人」の因(素)になっている国。

このように「日本」という文字から①②③と読み解けてきます。ですから日本の国はこれらを統合した意味合いを持つ国であると理解することが出来るのです。

「日本とは宇宙の創造主の能力が初めて開かれた国であり、人が生まれ出た元の国」ということになります。このように光透波理論にもとづいて字割すると「日本」の本質が明らかに浮かび上がってくるのです。

他国と比べると穏やかであった日本

このような国柄の日本の国ですが、それでも長い歴史の流れの中では戦国時代に代表される戦乱の時代も幾たびありました。

しかし、世界中の国でしばしば起きている国民や領民

「二」は天鏡図では「兒」の字が出てきます。「兒」は「白」「ノ」「L」のパーツに分けられます。「白」「ウス」↓「宇宙の主」↓「創造主」。「ノ」は「能」。「L」は「開く」意味。したがって「兒」とは「創造主の能(はたら)きが開かれる」意味になります。

「ホ」は天鏡図に当て嵌めると「甫」初め。「ン」は天鏡図に当て嵌めると「云」。

したがって「ニホン」の国とは

① 「最初の創造主の能(はたら)きが開き運ばれた国」という意味になります。

さらに「日本」の「本」の字を昔は「本」の字を使っていたので、この旧字をベースに読み解いてゆくことにします。

「日」を字割すると「口」と「二」に分けられます。

「本」の字は「大」と「十」。

「二」↓「ヒ」↓秘密の「秘」。「十」は「ト」と読めますので「ト」↓「答」。「十」は「秘密の答え」。

また「ヒト」と読めますので「ヒト」↓「人」。

そして「口」「大」の部分の前図のように組み合わせると「因」の字が出てきます。これらを纏めて意

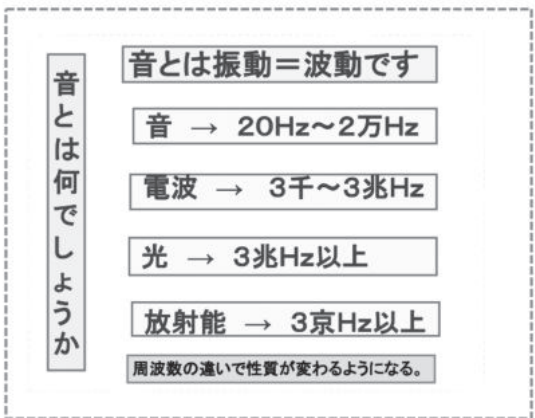
を皆殺しにするようなジェノサイド、残酷な戦は有りませんでした。一般農民や領民たちが多数殺されるということは殆ど無かったです。戦いに敗れた大将や重臣たちが切腹することで納まってしまうことが多かったのです。世界の国々で度々起きていた絶滅に近い凄惨な戦禍と比べると、日本は桁違いに温和な歴史を辿ってきた国と言えます。

全ては波動で成り立っている

その原因が母音中心の日本語の波動にあることは既に記してきました。このことを更に理解していただく為に、「全ては波動によって成り立っている」という現代科学の観点から考えてみたいと思います。全ての物質も、私達の肉体も、地球も、宇宙も、総ては波動・エネルギーによって成り立っているということが現代科学の前提です。

ここに視点を置いて言葉について考えてみると言葉は

音です。音は1分間に20ヘルツから2万ヘルツの振動音です。この振動数⇨周波数が大きくなるに従い各種の電波・各種の光・各種の放射能……、と掲載図のように性質を違えたものになってゆきます。



そして現代の科学では捉えることが出来ない匂い

この聖書の文言を素直に読み解くと、言葉には凄い一面があることに気付かされると思います。私達が日頃、道具の一つづらいにしか認識しないで使っている言葉が、宇宙や神に繋がっているという…、信じられない内容が書かれているのです。言葉は音、音は波動、この波動が絶対的な力をもって森羅万象を生成流転させていることが浮かび上がってくるのです。

このような「言葉の神性」に関してはスピリチュアルの世界ではしばしば説かれてきているのです。心ある人々に高く評価されている岡本天明の日月神示には「言波は神なり」と明言されており、空海や出口王仁三郎等の教えや、宇宙の意識体から降ろされたと思われる啓示・霊言・神言・御筆先等の中にも数々書かれてあります。

量子力学を根拠に置く現代科学の見解と精神世界で説かれていた内容が、奇しくも「波動⇨言葉⇨神」で一致してくるのです。このような見解は「言葉の国」日本に宇宙的必然の下に出現した文字の言霊学⇨光透波の理論に立てば至極妥当なものと理解できてくるのです。命波

にしても、心にしても、命にしても、その他、総てのもののは皆、波動・周波数の違いによって成り立っているものと推理されてきます。

言葉⇨振動音を広義に波動と置き換えますと、「全ては波動」とする現代科学の見解と見事に一致する有名な言葉があります。

言葉が神？ 信じられますか

それは、今から二千年程前から伝わっている新約聖書のヨハネ伝福音書、第一章の言葉です。

「初めに言葉があった。

言葉は神と共にあった。

言葉は神であった。

この言葉は、初めに神と共にあった。

万物は言葉によって成った。

成ったもので言葉によらずに成ったものは

何一つ無かった……」

学（光透波理論）に立てば、全ての波動の中で最高究極の波動が光速の無限乗の超々速度の世界の「光」の「透」明な「波」動、すなわち「光透波」⇨「コトハ」⇨「言波」の波動という見解をとっています。

ところが人類は有史以来、この言葉の真髄と神性に気付くことが出来ませんでした。そして言葉を道具の一つづらいにしか認識せず、嘘言ったり、駄洒落言ったり、悪い言葉を乱発し続けてきました。その言葉の乱れが、波動を乱し、心を乱し、世の乱れの根本原因になっていることに気付くことが出来なかったのです。

日本語だけが母音中心の言語

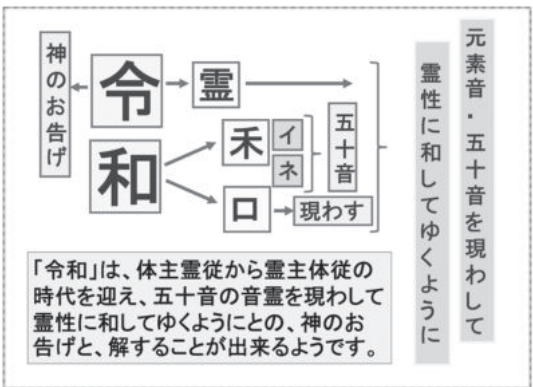
重複しますが大和の心に通じる日本人の心根は、遙か縄文時代以前から培われてきた母音中心の日本語に起因していると推理されます。「言葉の原点」である「音」に視点を置いて考えますと、言葉の国・大和の国の本質が浮かび上がってくるのです。

言語学者の説によると世界には6500から7000もの言語があるようです。そして日本語を除くと全ての言語が子音中心の言語であるということです。ですから日本語が如何に特異な言語であるかが理解できてくるのです。

母音は母なる波動、すなわち子供を包容する大いなる愛の心の波動を有しています。それ故に日本語は自然と宇宙と調和し、大和の心を醸し出すエネルギーを発揮することができているということです。一方、子音の波動はお互いが競い合い、独立して、自身の存在を保持しようとして競い合う波動を出すのです。それ故にエゴの心を醸し出す音のエネルギーを有しているということです。母音と子音の違い、そこには大きな大きな開きが出て来るのです。

日本民族にしか与えられていない母音中心の言葉、この波動によって大和の心が生み出され、他に比類ない輝かしい歴史と和の精神性を日本の文化は育むことができてきたと言う訳です。

年であり、「子≡ネ≡音」から始まる新たな幕開けの年と言えましょう。



いよいよ「体主霊従」から「霊主体従」に大きく転換する令和の時代の実質的なスタートの年と言えるのです。

遅きに逸していますが…でも今からでも間に合うと信

謀略的な言語操作で魂を失った日本

ところが現代の殆どの日本人は大和の心を失わされています。戦後のGHQの占領政策によって押し与えられた罪悪史観や、ソ連のマルクス・レーニンや、チャイナの毛沢東などの共産思想、さらに近年では近隣国の〇〇や〇〇の思想的謀略により多くのマスメディアが影響下に置かれ、それらの操作された報道によって殆どの国民は洗脳されてしまっているのです。そのため現代日本人の多くは武士道に代表される本来の誇り高い精神性を喪失してしまっているのです。そして物・金・エゴ中心の拝金主義に陥って、日本本来の魂を失っているのです。

「令和」≡霊性と和す新たな時代の幕開け

今年先の戦争が終わって75年目を迎えます。年号が「令和」≡「霊性と和す」の意味を持つ時代に入って2年目の年であります。干支で言えば「子の年」始まりの

じ、私達は我が国の混迷と世界の平和実現に向かって、日本人本来の調和の心、平和の心、日本精神に立ち返らなければなりません。同時に並行して言葉の乱れを正す必要があるのです。

大震災時に発露された日本の心

戦後、日本人の精神性は地に落ちていたのですが、それでも日本人本来の精神性の高さが発揮されたことがありました。それは9年前の東日本大震災の時です。東北の各被災地で家も財も家族も失った人々の群れが、列をつくり配給の食糧を受け取っていました。飢えているのに、争わず、人の礼を守って。飢えていても譲り合う心「礼」。飢えていても相手を思いやる心。そして被災現場の崩壊した家などから持ち主不明の遺失物として金庫など23億円のお金が届けられたということです。これこそ日本人の大和心の発露のものでもないのでしょうか。

世界中のメディアが、悲惨な災害現場の中でも秩序を守り助け合う日本人の和の行動を報道し、「日本人は違う」と称賛の声が世界の各地から湧き上がったのでした。人と人、人と自然、人と宇宙が共振共鳴する母音中心の日本語の響きから生まれる根っ子にあたる和の精神が辛うじて残って発揮されたからでした。この調和と平和の生き方こそ、今日の地球人類が最も必要とするものなのではないでしょうか。

和の波動を生み出す日本語とその文化に、現代日本人は目覚めることが求められているのです。そして、GHQの占領政策を初めとする諸外国の謀略的思想や言語操作により喪失してしまった日本本来の精神・大和の心に回帰する必要があります。

その意味で宇宙的必然性のもとに生まれた文字の言葉学・光透波を学ぶ意義は大きなものがあるのです。何故なら光透波は言葉の奥に秘められた真理を読み解く哲理であるからです。(詳しくは『光の言葉』で原点回帰全ての人が救われる道』を参照してください。)

日して同6年に世に出された『告日本國』という本の一文です。

二人目は大正11年に来日している相対性原理で有名な世界的な科学者、アルバート・アインシュタイン博士の有名な言葉です。



ポール・リシャールの言葉

曙の児等よ、海原の児等よ

花と焰との国、力と美との国の児等よ

聴け、涯しなき海の諸々の波が

日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を

諸子の国に七つの榮譽あり

故にまた七つの大業あり

さらば聴け、其の七つの榮譽と七つの使命とを

独り自由を失はざりし亜細亜(アジア)の唯一の民よ

貴国こそ亜細亜に自由を与ふべきものなれ

曾(かつ)て他国に隷属せざりし世界で唯一の民よ

「初めにコトバ、言波は神なり」、人々が長きにわたり気づかなかつたこの宇宙を貫く真理こそが、混沌の時代を導く道標(みちしるべ)になるものであるからです。



日本の使命を伝える二人の外国人の英哲

引き続き日本国の本質と使命を理解して頂くために、炯眼を有した二人の外国人の言葉を紹介させていきます。

明治・大正の時代、国力を急速に進展させた日本は彗星の如く世界の表舞台に踊り出た時代とも言えるようです。その我が国が歩んできた輝かしい足跡に着目し、日本の歴史・伝統・文化を考究されて日本の本質を喝破された言葉です。

一人目は詩人であり、神学者であり、弁護士でもあったフランス人のポール・リシャールです。大正5年に来

一切の世界の隷属の民のために起つは貴国の任なり
曾て滅びせざりし唯一の民よ

一切の人類幸福の敵を亡ぼすは貴国の使命なり

新しき科学と旧き知恵と、欧羅巴(ヨーロッパ)の思想と、亜細亜の思想とを自己の裏(うち)に統一せる唯一の民よ

此等二つの世界、来るべき世の此等両部を統合するは貴国の任なり

流血の跡なき宗教を有てる唯一の民よ

一切の神々を統一して更に神聖なる真理を発揮するは貴国なる可し

建国以来、一系の天皇、永遠に亘る一人の天皇を奉戴せる唯一の民よ

貴国は地上の万国に向かつて、人は皆な一天の子にして、

天を永遠の君主とする一個の帝国を建設すべきことを教へんが為に生れたり

万国に優りて統一ある民よ

貴国は来るべき一切の統一に貢献せん為に生れ

また貴国は戦士なれば、人類の平和を促さんが為に生れたり

曙の児等よ、海原の児等よ

斯く如きは、花と焰との国なる貴国の七つの榮譽と七つの大業となり



この詩の中で謳っているように、ポール・リシャールは日本は「七つの名誉」を持っている国であり、それ故に世界の何処にもない「七つの大業」の責任を果たさなければならぬ国であることを強調されているのです。

この詩をより分かり易く理解していただくために、現代日本人に精神的な目覚めと誇りを呼び掛けている啓蒙作家である台湾人の黄文雄氏の解説を掲載しておきます。

(一) 日本は唯一アジアで自由を失わなかった。

だから日本人はアジアに「自由を与える」義務がある。

その驚異的な発展には他の国と違ったなものかなくてはならない。

果たせるかなこの国の歴史が、それである。

この長い歴史を通じて一系の天皇を戴いてきたという国体を持っていることが、それこそ今の日本をあらためたのである。

私はいつもこの広い世界のどこかに一か所ぐらい、このような尊い国がなくてはならないと考えてきた。

なぜならば、世界は進むだけ進んでその間幾度も戦争を繰り返して来たが、最後には闘争に疲れる時が来るであろう。

この時、人類は必ず平和を求めて、世界の盟主を挙げねばならない時が来るに違いない。

その世界の盟主こそは武力や金力でなく、あらゆる国の歴史を超越した、世界で最も古く、かつ尊い家柄でなくてはならない。

世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。

それはアジアの高峰日本に立ち戻らねばならない。

我々は神に感謝する。

(二) 一度も外敵によって滅ぼされたことのない日本は「人類の幸福の敵を滅ぼす」使命がある。

(三) 新しい科学と古き知恵を統一できた日本人には、西洋と東洋を結びつけ、それを融合する任務がある。

(四) 宗教対立・流血の歴史を持たない日本人には、一切の神々を統一し、「さらに神聖なる真理を發揮する」使命がある。

(五) 天皇と日本国民の歴史には、世界を一君万民の原理のもとに「一つの帝国」とする役目がある。

(六) 「万国に優れて統一のある民」として、来(きた)るべき一切の統一に貢献する使命を持つ。

(七) 「戦士」として、「人類の平和」を促す義務が生じる。



アインシュタインの言葉

近代日本の発達ほど世界を驚かしたものは無い。

神が我々人類に、日本という国を作っておいてくれたことである。

令和2年1月吉日

プロフィール

宿谷直晃 (しゆくや・なおあき)

昭和16年、東京生まれ。光透波研究者。

若いころから求道の心を持ち、某国立大学教授の著書「神詣記」に出会い「コトバを正すことが世の浄化に必要不可欠」と知る。平成17年秋に光透波を啓かれた小田野早秧先生の直弟子・磯部賢一氏に出会いコトバの神性を解明する「光透波」に共感共鳴し、探究を続け、現在は講師活動を行う。「光の言葉普及会」主宰。

主な著書に『言霊(光透波)の世界』(ヒカルランド)、『光透波理論』の全貌(ともしよし社)、『光の言葉』で原点回帰 全ての人が救われる道 ミロクノ時代を導く光透波理論(でくのぼう出版)。